

< 思考の形としての小説 >

講演会対策プレゼン 2000.11.16 森原龍介

0. はじめに

本プレゼンは保坂和志の「<私>という演算」を中心に、小説という形をとって表出する彼の思考、その内容と方法を読み解くことを目的とする。まず、保坂のその特異な小説観を表す次の2つの文章に注目したい。

ぼくにとって小説というのは、フィクションであるかどうかということではたぶん全然なくて、歌かどうかということであるらしい。(注1)

ブルースの歌手や河内音頭の歌手が身のまわりにあったことを即興で歌ってそれでも歌になっている、というような意味でこれは小説なのだ。(注2)

これらは両方とも小説集と題された書物(一般的にはエッセーと呼ばれるであろう)のあとがきに記されている。これらの本に表れるのは保坂の生の思考、世界観(!)なのである。

1. 「<私>という演算」

この本は9つの章からなる小説集で、その題材は全て保坂の日常によっている。その内容は写真に写った猫から始まる思考、エヴァンゲリオンのこと、死について等、多岐にわたっている。以下では個別に内容を読解していくのではなく、全体を通して繰り返されるテーマ(のようなもの)を追っていくこととする。

2. 「死」をめぐる問題

「<私>という演算」を通じて繰り返されるテーマの中でも、とりわけ重要だと思われるものの一つに「死」が挙げられる。

一年前に死んだ一番若かった猫とぼくとの関係をぼくは考えつづけている。前足の一方の先がない犬のことから書き出したのも、「この世からいなくなる」ことと「ぼくが生きている」ことの二つのつなげ方が全然わかっていない今の状態では、自分の猫のことからは書ききれなかったからだ。(注3)

保坂の思考は「死」を眼前にして停滞する。というよりも思考が次の思考を生み出し、結論の出ない思考のどうどう巡りとも言うべき状態に陥ってしまうのだ。引用を続けよう。

(ぼくが生きているという)この考えにはあくまでも生きている側からの視点しかなくて、あたかも第三者としてみるような、生きている自分と死んだ犬を同等に相対化する視点というか論理というか作業というかそういうものがない。(注4)

ここで保坂の述べる「第三者の視点」とはいったい何なのであろうか。これは単純に物事を俯瞰してみる、というようなものではあるまい。そもそも彼は物事を単純化して理解することを好まない。そして実際に保坂は本書の後半で、とりわけ文学において「死」を客観視する姿勢を否定する。

彼ら(太宰、三島、ヘミングウェイ)は「死」をかなり題材にしているけど、それは書かれることが可能な「死」(三人称の死)であって書かれることが可能であることの外にある「死」とはならない。「死」は「私の死」でない限り「死」とはならない。(注5)

「死」に関しては、ひとまず上記のような記述に収まるわけだが、しかしこれはまだ宣言に過ぎない。「死」を記述するための「別種のディスクール」を準備しているところなのだ。

3. 第三者の視点

続いて2の項で触れた「あたかも第三者としてみるような」視点というものについてもう少し詳しく考えてみたい。第三者的な視点は、始まりと終わり(あるいは中心)が明確に与えられた宗教的な世界観とは対極に位置していて、科学的立場と密接な関わりを見せるのである。科学的な立場では世界像というものは場当たりの変化していくものなのである。科学的な観察が進めば進むほど最終形や中心がないことが明らかになっていくのだ。(天動説から地動説への転換はその最たる例だ。)(注6) 第三者の視点とは中心(自分)を持たない視点のことなのである。

本当に世界の実体を知りたいと思うのなら、<私>の次元をいったん切り捨てて、世界の法則や掟を知ることには喜びを見いだしなさい。(注7)

ということなのだ。ここで改めて2の項の「死」の問題について考えたい。第三者的な視点から「死」を見つめ直すことは、自分ではない誰かの「死」を感情移入とは別の次元で捉え直し、その上で改めて自分の問題として自分の元にひき付けることなのである。

4. 「時間」の問題

保坂は時間についても考察を加える。

ぼくが今リアリティを感じているのは、(中略)この、「時間がこの世界に残らないで消えてしまう」という(郷愁を生み出す)前提ないし法則の方だ。(注8)

この発言は、赤ん坊の自分と猫が写っている写真を見てなされたものだ。ちなみにここで使われているリアリティという単語は、私たちが普段使う意味でのリアリティだと思われる。(注9)

5.世界(空間)の認識～人称の問題へ

保坂はしばしば、人が思考する際に視覚(あるいは視覚イメージ)に頼りすぎていることを指摘している。「原子の中で、原子核の周りを電子がまわっている状態を、太陽の周りを惑星が回っているような視覚イメージで普通考えることになっているけれど、電子というものは惑星のような実体を持ったものではないので(計算上でしか存在しない)、太陽系のような視覚イメージを使うことは本来正しくない」(注10)のである。結局のところ人間は太陽系も原子も俯瞰することはできないのである。それではこの俯瞰という概念はどのように文学に活かされているのだろうか？

俯瞰を排除して作品を作り上げたとして保坂が評価しているのはカフカである。「三人称が用いられているにもかかわらず徹底して主人公グレゴール・ザムザの目によって実際に見えるものに限定している「変身」において、ザムザは、自分の姿の全体をみることはできないのだ。もちろんそれは読者にとっても同じことである。結局のところカフカだけでなく、誰にとっても「世界」とは俯瞰することができない」(注11)のである。このことは保坂がそのほとんどの作品を1人称で書いていることともつながるはずだ。保坂が徹底して即物的な描写を行うのも、「実際に目に見えたものにだけ注意を集中」(注12)しなくては世界は理解できないと考えているからではないだろうか。

6.リアリティの問題～保坂的思考法

本書に限った話ではないが、保坂用語の代表的なものに「リアリティ」が挙げられる。

つじつまが合いすぎてどうもリアリティがない。(注13) 「腑に落ちない」という気分自体じつは一番リアルな何かということなのかもしれない。(注14) 「<<私>>という演算」が複雑になればなるほど、リアリティが生まれてくるような気がする」というのは、だから、<<私>>という演算」が複雑になればなるほど、不確かさが膨らみ、それが今こうして自分が生きていることに触れるというような意味だ。(注15)

世界を理解し、自分を理解するために、保坂は思考する。

ぼくは考えるということは山登りじゃなくて、モグラが穴を掘るようなものだと思っています。穴を掘ると、掘った分だけ、穴の壁面すべてが次に掘れるところになる。つまり、考えるっていうのは、考えたことすべてが次の考える材料になるという、際限のないことだと。(注16)

考えて考えて考え抜いてそれでもその先にあるのはやっぱり次の思考の材料だったりして、もはや自分が思考している対象そのものもぼんやりとしてきてしまう。しかしそこにこそ保坂の考える「リアリティ」そして「生きる喜び」は存在するのである。

注

1 「私という演算」p.201

2 「生きる喜び」p.145

3 「<<私>>という演算」p.112 以下書名の指定がない場合はここからの引用とする。

4 p.106

5 p.200

6 p.104

7 アウトブリード p.30

8 p.24

9 保坂はしばしば「リアリティ」を「不確かさ」という意味でも使う。

P.174

10 世界の始まりの存在論 第二回 p.303

11 世界の始まりの存在論第2回 p306

12 世界の始まりの存在論第2回 p.305

13 p.67

14 p.157

15 p.180

16 文学界 2000年1月号対談「言葉の外側へ」